

大学進学時の自己決定を支える情報を いかに提供すべきか —2020 年度新入生意識調査から—

前田理歩¹⁾、伊藤嘉高¹⁾、瀧口徹¹⁾、柴山純一¹⁾

1) 新潟医療福祉大学 医療経営管理学科 医療情報管理学科

【背景・目的】 大学生等の学生の進路決定には「自己決定」が重要であるとされる¹⁾。自己決定による進学は、進学後の学校適応や精神的健康に有意に関連しているからである²⁾。そして、自己決定とは、多くの場所と人からの情報と支援を得てはじめて可能になるものである³⁾。

新潟医療福祉大学医療情報管理学科(以下、本学科)は、多様な学びと将来の選択肢を用意していることから、学生の自己決定力が重要となる。しかし、これまで新入生が、どのような情報と支援にもとづき自己決定し、本学科を受験校として選択し入学に至ったのかについて調査を行ってこなかった。そこで今回、2020 年度の新入生を対象に意識調査を行い、新入生がどこからどのような情報を入手し受験と入学に至る自己決定を行ったのかを検討した。

【方法】 2020 年度本学科新入生(以下、新入生) 86 名を対象とし、5 月中下旬に Google Forms による無記名アンケートを実施し、全問回答があった 77 名を分析対象とした。調査項目は、個人属性、将来の希望、オープンキャンパス(以下、OC) 参加状況、学科プログラム評価、受験校情報の入手元、および本学科入学の決め手等とした。解析は、SPSS Statistics 21 を使用して行った。

なお、本アンケートは、授業アンケートなどと同様に第一義的に研究目的でないため文部科学省・厚生労働省の「臨床研究に関する倫理指針」の対象には該当しないと判断し、倫理審査委員会への承認申請を行っていない。また関連する利益相反はない。

【結果】 新入生の 73%が OC に 1 回以上参加していた。しかし、各学生の入試区分によって OC の利用度は大きく異なっており(表 1)、AO・特別推薦および指定校推薦では 2 回以上 OC に参加した新入生は 53~65%であった。これに対して、一般・センター入試区分の場合は、OC 参加 1 回が 25%で 2 回以上はなく、75%が不参加であった。

学科プログラムで評価が最も高かったのは「学科のカリキュラムの説明」であり、入試区分に関係なく 70%前後に達した。次いで「資格・仕事内容の説明」63%、「教員と学生の距離の近さ」が 45%であった。受験校を決める際の情報の入手先として「公式サイト」および「オープンキャンパス」がともに 51%、次いで「インターネットの口コミ」38%であった。

受験先教育機関の選定にあたっては、「資格・仕事内容」が 68%で最も高く、次いで「就職状況」66%、「カリキュ

表 1 入試区分と本学科入学者オープンキャンパス参加回数 のクロス集計表

入試区分	本学科入学者オープンキャンパス参加回数					合計
	1	2	3	4~	参加せず	
AO・特別推薦 (n=17)	29.4	35.3	29.4	0.0	5.9	100.0 %
指定校 (n=36)	27.8	22.2	30.6	13.9	5.6	100.0 %
一般・センター (n=24)	25.0	0.0	0.0	0.0	75.0	100.0 %
合計 (n=77)	27.3	18.2	20.8	6.5	27.3	100.0 %

ラム」51%であった。本学科入学の決め手は、「カリキュラムの幅の広さ」62%、次いで「就職状況が良い」47%、「カリキュラムと自分の関心の一致」39%であった。

【考察】 新入生の 7 割強が OC に参加していたことから、入学希望者の自己決定に必要な情報提供の場として OC が極めて重要であることが示唆された。しかし、入試区分によってその参加度は大きく異なり、一般・センター区分では OC が入学の決定要因になっていなかった。

OC 以外の情報入手先では、「インターネットの口コミ」が 38%に達していた。しかし、口コミサイトの情報はいかなる客観性も代表性も信頼性も担保されていない。とはいえ、各種の大学公式媒体に登場する学生の声の多くもまた模範的なものであり、代表性などを有してはいない。

しかしながら、進学先の自己決定には、客観的な判断が求められる一方で、「自分もこうなりたい」という主観的な抑えきれない感情を引き起こすことも必要だろう。だからこそ、受験生は口コミサイトなどで主観的な情報を探そうとする面もあるのかもしれない。

したがって、今後の情報発信では、この主観的な感情にさらにアプローチすることが求められる。具体的には、ブログや SNS などのメディアを活用して、学生生活や学びの「多種多様な」モデルを「数多く」発信し、受験生一人ひとりの固有の自己決定をうながすことである。

もちろん、受験生の正しい自己決定に資するためには、資格取得率や就職率のみならず、学びのプロセスに関しても客観的なデータを提供し透明性を確保することが必要である。たとえば、カリキュラム選択や就職に対する自己決定の実態である。この点に関する在学生アンケートなどの実施と公表が考えられる。

【結論】 進学先の自己決定に寄与する情報の多くは OC で得られていた一方で、多様な学生の自己決定を支えるためには OC 以外でのさらなる情報発信が必要である。

【文献】

- 1) 奥村弥生, 森田愛望, 青木多寿子: 大学進学時の進路選択における親の関与と進学後の自立および適応との関連. 心理学研究, 90(4), 419-425, 2019.
- 2) 永作稔, 新井邦次郎: 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討. 教育心理学研究. 53, 516-528, 2005.
- 3) 伊藤嘉高: 生と死のあいだ, 吉原直樹・近森高明編, 都市のリアル. 有斐閣, 137-54, 2013